

ぼくたちの向こう側

2009.08.24

なんのために 生きているんだろう。

ぼくは たまに、わからなくなる。

いや、いちどでも わかっていたことなどないけれど、
それを 考えだすと、止まらなくなる。

まるで、
ぼくが死んだら、ぼくの意識は 死んだら どうなるのだろう？
という疑問のように。

その考えは、ぼくのまわりを まとわりついて、離れない。

自分に 問いかけ続けなさい。

あのひとは、そう言ったけれど。
問いかけども 問いかけども、答は 見つからない。

生きているだけで、いいんだよ。
生きることに 意味など ないんだ。

彼は、そう言った。

あなたが生きていることが、
わたしの ためになっているわ。

彼女は、そう言った。

違う。
違うんだ。

外からの答じゃない。

自分の中からの答が 欲しいんだ。

ぼくは、来る日も 来る日も 自分に 問いかけ続けた。

そうだ。

いつか、きっと わかるはずだ。

その日、ぼくは 国道沿いを 歩いていた。

急ブレーキの音が聴こえ、振り向いたときには、
もう遅かったようだ。

いや。

「遅かった」というのは、後から証言した、通行人の意見。

僕にとっては、待ちに待った瞬間だった。

急ブレーキの音が聴こえ、
振り向きざまに、僕の身体は 宙に浮いた。

その瞬間、ぼくは、思いだしたんだ。

なんのために生きていたのか、を。

おとうさん。

おかあさん。

ぼく、わかったよ！！

その瞬間、誰かの声を聴いたかもしれない。
だけど、それは もう なんの意味も持たないことだった。

だって、そのとき、ぼくは…

「ニンゲン」という名の器を 離れたのだから。

「ぼく」は、ずっと 下の世界を、見ていた。

「かれ」が 悩んでいる姿を、ずっと 見ていた。

「かれ」と「ぼく」は 同じ存在だ。

「ここ」では、「かれ」と「ぼく」の意識が
別々のところで、別々の動きをしても、まったく 問題ない。

「かれ」の成功は、「ぼく」の成功だ。
そして、「かれ」の失敗は「ぼく」の失敗だ。

なんとしても こんどこそ、
「かれ」には やってやらなければならないんだ。

「ぼく」は、「かれ」に ヒントを与えることにした。

ここにいる、「ぼく」には わかっているが、
あそこにいる、「かれ」には わからないこと。

あそこにいるときの「ぼく」には わからないが、
ここに戻ってきたときの「かれ」には わかること。

もうなんども、「ぼくたち」は しくじり続けてきていた。
そろそろ、タイムリミットだ。

ヒントを出すことは、
「ぼくたち」にとって 賭けともなる、キケンなことだった。

だけど……。

「ぼく」は、決心した。

なに、かんたんなことさ。

「ぼく」は「かれ」に コンタクトするべく、ひょいっと手を伸ばした。

ああ！
なんてこったい！

「ぼく」は「かれ」にほんの少しだけ ショックを与え、
その衝撃で「あれ」を 思い出させるつもりだったのに。

やつは、「かれ」の息の根を止めちまった。

「かれ」は その瞬間 思い出したらしいが、
そんなの、もう 遅い。

「ニンゲン」という器を離れてしまったのでは、
「あれ」を思い出したところで、意味がないんだよ。

「ぼく」は 唇を噛みしめ、下の世界のドタバタを じっと 見ていた。

トン、トン。

「ぼく」の肩を叩くものがいた。

ああ、きみか。

ということは…？

真っ白な天井の静寂を破るかのように、
ぬっと マスクをした顔が いくつか、あらわれた。

お尻を叩かれ、「おぎゃあ！」と声を上げると、
安堵のため息と 静かな歓声が 湧き起こった。

わかったよ。
こんどは、「ぼく」の番なんだね。

こんどは、ちゃんと、やるさ。

こんどは…？

ちゃんと…？

ええ一つと。

ぼくは、なんのために 生まれてきたんだっけ？